

リアルドリーム文庫

ドクスおじさんの
ネットネットしつこい
美少女凌辱

ねとりりよかん

寝取り旅館

葉子

編

試し読み版

挿絵/篠岡まれ 大角やぎ

番外編2	犬タイプと猫タイプ 〜菜子編〜	265
番外編	ドスケベ山○線ゲームから始まる汗だくラブホセックス	237
第十一章	制服美少女と痴漢プレイ 協力プレイで生意気女を昏睡させる	219
第十章	超危険日、破れるゴムと破れる友情	196
第九章	彼女レース、決着	176
第八章	デート妨害セックス	149
第七章	体育倉庫で先輩後輩プレイ 〜ペニス部の放課後練習〜	127
第六章	学校でセックス。ドア一枚挟んでイケメン太郎	109
第五章	純粹な無知少女、中年のネチネチ指導で調教される	90
第四章	制服少女と超危険日ゴム外しチャレンジ	59
第三章	和姦セックス動画で追い詰めていく	39
第二章	介抱プレイからの中出し征服	18
第一章	腐れた街と、腐れた男	6
プロローグ		4

登場人物

Characters

腐水 拓郎

(ふすいたくろう)

漁師町でひとりペンション経営をしている。性格は悪く被害妄想癖があり、狡猾で残忍。少女に淫語を言わせて征服欲を満たす性癖がある。

白谷 菜子

(しらたになこ)

清楚で控えめな女子校生。細身だがGカップの巨乳の持ち主。幼馴染の翔に想いを寄せ、親友の莉奈とともに拓郎のペンションに訪れる。

黒那 莉奈

(くろなりな)

生意気でクールな女子校生。Dカップのスレンダーなボディと長い脚のモデル体型。菜子と同様、幼いころから翔に恋心を抱いている。

桃田 翔

(ももだしょう)

菜子、莉奈が想いを寄せる長身のイケメン。二人との関係を壊したくないため、好意に鈍いふりをしている。



プロローグ

「お、おねがいます！ 今日、すごく、あぶない日だからっ……！」
生物には序列がある。

古い宗教の教えでは、家畜は屠殺され食われるために存在している。

「き、キスはいやあつ。あ——っ！ だめだめゴム外さないで！」
人間にも序列がある。

どんなに綺麗な事を並べようが、上位の人間に消費される家畜のような人間が存在している。

「あ、ナマだめえ……ん♡♡ あ、奥っ♡♡ ん、わかりました！ き、きす、キスしますからゴムつけてっ！」

普通に生きてきたはずなのに、罪を犯したわけでもないのに、
彼らは自動的に家畜として蔑まれる側だ。

「へあ……ん♡♡ ちゅむ……んむう……だえき、いれないで……んむ……♡♡」
惨めな思いをしてもすべては自己責任。

彼らは好き好んで家畜でいるのだと見下されている。

「いや——っ！ だめだめ早くゴムをつ！ きす、キスした！ ずっとナマで入ってる！ あ♡ うそうそだめ！ ナカだめっ！」

ところが家畜の中に、ある異常な個体がいた。

その家畜は醜く、太っていて、目は血走っていて、

「わかりましたちゃんと言いますから外につ！ わ、わたしの、きけんび、ま〇ここに……たくさん中出ししてっ、くださ、あ——っ♡」

家畜は牙をむき出しにして、言ったのだった。

——お高く止まりやがって、クソを喰らえ。お前も同じ家畜だと思い知らせてやる。

その男はとびきり陰湿で、

狡猾で、

残忍で、

人間に復讐するために生きていた。

第一章 腐れた街と、腐れた男

海沿いの古い町並みに、潮風が吹いている。

夏の日。ここはある漁師町。

八月はウニやアワビの旬を迎え、毎年それなりの観光客でにぎわう町だ。

四〇歳独身、あるペンションの主、腐水拓郎ふすいたくろうは生まれ育ったこの町が嫌いだった。昔からこの町の匂いが気に入らない。

立ちこめる潮の臭いを嗅いでいると、他界した親から受け継いだ小さなペンションという棺桶の中、このまま身体が腐り落ちていくイメージがわく。

臭い。臭い。

だから掃除を含めたペンションの管理だけは、脅迫的なほどしつかりやる。だが、今日は悪くない日だった。

泊まりに来た客が、玄関に充滿するくらい甘い匂いをふりまいているのだ。宿泊予約と年齢を見て、もしかしてと思っていたが……大当たりだ。

今日は『遊ぶ』しかない。

「よ、よろしくお願ひします」

拓郎の前に並んでいるのは一〇代後半の美少女二人だ。

まず宿帳に名前を書いて丁寧^{しんたにん}に挨拶したのは、白谷菜子^{しらたになこ}という少女だ。

小動物のような気弱な顔つきの、清楚な美少女。

薄い色素の髪をアップにして、真つ白なうなじを晒している。

身体は細いが柔らかさそうで、何より大きな胸がノースリーブのミニワンピースをいやらしく押し上げている。

「はあ……片付いてるけどなんか微妙」

巨乳少女の後ろで悪態をついているのは、黒那莉奈^{くろなりな}という女だ。

生意気な目つきだが、この女もすさまじい美少女だった。

長い黒髪にスレンダーな肢体。タンクトップにシヨートパンツ姿はまるで一流モデルのような佇まい^{たてまい}。なのに胸もしっかりある。

「……が、学校の夏休みで来たんです。これから受験で、なかなかみんなで遊べなくなるから」

聞いてもないのに巨乳美少女の菜子が言った。

いい子だ、と拓郎は思った。

一瞬、久しぶりの『遊び』をやめようか迷うくらいだった。

だが、

「温泉もあんだろここ。みんなで一緒に入るか〜！」

クソ腹立つイケメンがいた。

「は、入らないよ。何言ってるの、翔くん」

「……バカ翔は相変わらずね」

美少女二人が、頬を染めてまんざらでもない顔をしている。

拓郎は思った。好感度全開じゃねえか畜生。

宿帳の名前には桃田翔とある。

身長一八〇cmはありそうな、腹が立つくらいの長身美少年だ。

最高クラスの美少女二人を引き連れてモテモテ旅行ってか。くたばれ。

こんなの絶対『遊び』するしかないだろ。

拓郎はそう決意し「それではどうぞ、お部屋まで案内します」と笑顔を作るのだった。

○

ペンションの部屋は全部で四部屋で、拓郎は一行を二階奥の「特別室」へと案内した。どのあたりが特別かと言えば、一番高性能な隠しカメラとマイクがある。

拓郎は入室した一行に一通り館内を説明して部屋を出た。

管理人室に帰ると、部屋の机に並んだモニター画面には、荷物を整理するさっきの三人が映っていて、

『じゃ、俺、先に温泉入るわ！』

イケメン野郎がタオルと浴衣を持って部屋を出ていく。

『……………』

残された少女二人、菜子と莉奈は、無言で浴衣に着替えだした。

美少女の着替え。

二人のワンピースとタンクトップが、すっと脱げ落ちて。

拓郎は生唾を呑んだ。

——二人ともすごい身体だ。

細身巨乳の少女は、脱げばやはり圧巻だった。

真っ白でふるんと大きい胸に、ほっそりとした首と腕がコントラストを作って、ひどく淫靡な曲線を描いている。

一方の黒髪の少女の美脚は芸術品のようにすらりと伸びていた。

引き締まったヒップはつんと上を向いて、交尾をねだるような、本能に訴えかけるエロさがある。

「すげえ……最高の獲物じゃねえか」

拓郎は思わず目を見張った。

柔らかそうな細身の巨乳と、長い脚のしなやかでスレンダーな身体。

タイプは違うが、どちらも極上の身体だった。

「ああ……はやく俺の汚い身体をこすりつけて射精してえな」

あの巨乳を揉みながら。

あの美脚とケツを、後ろから乱暴に犯しながら。

拓郎はすでに勃起していた。興奮で軽い動悸までしていた。寧丸がぐつぐつと精液を作る音まで聞こえるようだ。

『分かってるでしょ？ これからどっちが翔と付き合ったとしても文句言わない』

カメラ越し。無音だった部屋で、マイクが小さな声を拾う。

黒髪スレンダーの莉奈が、浴衣に袖を通しながらつぶやいたのだった。

『うん……この前きちんと話し合った通りで。恨みっこなしだよ』

細身巨乳の菜子が答えると、拓郎は一瞬考えて……にんまりと笑った。

拓郎は人の感情に敏感な男だった。

悪意にしろ好意にしろ、鼻が利く。

この二人がイケメンに好意を向けているのは間違いないようだったが――。

今の会話からすると、おおかたどちらが先に仲良くなって告白するかも競っているのだろうか。

しかしあのイケメンはこんな美少女を前にして、自分から手を出していないらしい。それに、この関係を逆手にとっているいろいろな悪戯ができるかもしれない。

拓郎は下卑た笑みを浮かべた。

拓郎の人生は終わっている。まっとうな人生を送ろうとすればこの町で腐っていくだけだ。だから美少女と『遊ぶ』。それが拓郎という人間だ。

もちろん捕まる危険性を減らすのもゲームの一部だ。

この三人の関係を上手く使えば、それが可能だと思った。

狡猾な思考をめぐらす拓郎の目の前で、ほぼ下着姿の二人の会話が続く。

『とうか菜子、あなた温泉入る?』

『う、うん。入るけど……』

『やめない? ペンション主が気持ち悪くて、盗撮とか心配で』

『か、考えすぎだよ』

『ま、冗談よ。でもあの男、変な太り方してるし顔もぬらぬらしてるし、部屋は綺麗だけど正直ハズレじゃない? あんなのが視界に入っただけで一日がもう台無し』

『それは……ちよつと思っただけ。あと、けっこうワキガだよね』

「ふふ、菜子が嫌そうな顔するのって久しぶりに見た」

莉奈と菜子の会話に、拓郎は『遊び』の決行を完全決定した。

——好きでこの身体に、好きでこの町に生まれたわけじゃない。

人生を謳歌している美少女二人へ、ふつつつと怒りが湧いてくる。

これは腐れた町に生まれ、腐れた身体と腐れた性格に生まれた拓郎バケモノの、世の中への身勝手な復讐の物語である。

○

もちろん温泉は盗撮されているのだった。

二人とも、一〇代特有のしなやかな身体をしている。

真つ白で、柔らかかそうなのに張り詰めている。タオルがいらなくらい肌が湯を弾いている。

二人とも、乳首の色は薄く清潔なピンクだった。上手くいけばこの乳首を臭い唾液まみれにできるのかと思うと、いやが上にも興奮してくる。

拓郎はスマホで盗撮画面を覗きつつ、ずっと半勃起の状態のまま夕食の準備を進め

た。

調理する。匂いの強い料理に睡眠薬を少しずつ仕込む。

コルクがされたボトルに、特殊な針で薬を注入していく。

あのイケメン野郎は確実に仕留めなければいけない。男用で出す膳の料理にはしっかり薬を仕込んでやる。

『遊び』の始まりだった。



「お食事です」

一時間後、拓郎は、少女たちの部屋に夕食膳を出した。

美少女二人が湯上りの上気した顔で、いい匂いを部屋中にふりまいている。

「お、アワビうめー！」

「うん、おいしいね！」

「海鮮だけは、まあ……どこの店もこのくらいなんでしようけど」
何度かに分けて膳を部屋に入れる。

翔というイケメン野郎は、アワビを食いながらはしゃいでいた。

美少女二人は、イケメン野郎にすり寄るように座る位置を徐々にずらしている。

拓郎が膳をすべて入れ終わると、もはや美少女二人がイケメン野郎を挟む構図になつていた。

——浮かれやがって。

拓郎は心の中で舌打ちしつつ、あるものを取り出す。

「宿泊セットサービスのドリンクです。大変飲みやすく甘いドリンクですが……未成年の方なら持ち帰ってご家族の方へのお土産にしてください。コルク抜きは部屋にあります」

「……そんなサービスあったかしら？」

莉奈が黒髪をさらりと揺らして首を傾げる。

よく読めや書いてあるぞと拓郎は心の中で悪態をつく。

実際、サイトには宿泊時にドリンクサービスと書いてある。もちろん今回は通常のドリンクやアルコールでなく、地獄への片道切符なのだ。

「それでは、ごゆっくり」

拓郎はドリンクのボトルを二本置いて、部屋から出た。

疑わせてはならない。

あくまで飲むのも飲まないのも自由というふうを提供する。

だが夏休みの旅行客が、この誘惑に抵抗できるはずがない。
イケメン野郎争奪戦。浮かれる女ども。酔いと勢いへの期待。

さらにイケメン野郎は二人の好意に気づいているのかいないのか、どちらにせよ意思の強くない、頭の回らない馬鹿。

『ね、ねえ。翔くん、このドリンク、ちょっとだけ試してみない？』

『お、いいな！ 俺一人だと気まずいと思ってたんだよな！』

管理人室に戻った拓郎が隠しカメラのモニター画面を見ると、意外や意外、気弱そうな菜子がまず切り出していた。

イケメン翔ももちろん乗る。褒められた菜子は嬉しそうだ。

『ちよつと……二人とも』

莉奈が止めるが、二人はボトルの中身をコップに注いで、かぼかぼ空けていく。

『ふわあ……これ、甘いけど濃い。なんかふわふわする』

菜子が浴衣の胸元をはだけさせてイケメン野郎に寄り掛かれれば、もう莉奈も黙ってはいられない。

対抗するように飲んで、同じくしなだれかかる理由を作るしかない。

『……ああ、もう』

クールな美顔でため息をついて、莉奈も飲み始めた。

しばし穏やかな時間が続く。

まったりと、今日の海遊びの感想や学校の話、軽い談笑が続く和やかな宴。しかし、一時間ほどで「その時」が訪れた。

『……なんか、ねみー』

イケメン野郎がどすんと横になった。

大きないびきを立て始めて深い眠りにつく。

一八〇cmの堂々とした身体は、銃で狩られた立派な獣のようにも見えた。

『わ、私も、眠いなー、……ん？ ……ほんとに眠い、かも』

本気の眠気。そしておそらく最後の力を振り絞ったあざとい作爲。

目をしばしばさせた菜子が、イケメン野郎に寄り添って横になる。

『もう、二人とも……ふわ、あ……』

莉奈もゆっくりと添い寝する。横になって少しだけ身じろぎして……地面に吸い付けられるように動きを止めた。

全員、目を閉じた。

もう今夜は意識が帰って来ることはない。

拓郎は管理人室から出て、三人の部屋のドアノブに手をかけた。

がちやりと抵抗。施錠済みだ。警戒心が強い。

酔った奴が外したということにして、マスターキーで開ける。

「お客様、お呼びになりましたか？」

白々しく訊くが、もちろん返事はない。

部屋の中では三人が深い眠りについていた。

美少女二人が浴衣をはだけさせて若いメスの匂いをぶんぶんさせている。

拓郎は思った。これからのことを考えると、今晚の獲物は『一人』だけだ。

その方が結果的に、二人とも徹底的に凌辱できる。

だから——拓郎は、手前の少女を抱きかかえた。

一〇代の少女の甘い香りがふわりと匂る。

腐れた町の、腐れた人生。だがこの匂いを嗅ぐと生き返る気がする。

抱えた身体は柔らかい。

はだけた浴衣から白い胸の谷間を見るときもう我慢ができなかった。

この匂いも、身体も、すみずみまで味わってやる。

まず最初の獲物として選ばれた少女は——。

第二章 介抱プレイからの中出し征服

徹底的に『遊ぶ』。拓郎はそう決めた。

まずは——この少女と。

「困りますよ、お客さ〜ん」

半笑いの拓郎が肩を貸しているのは、浴衣から胸の谷間をはだけさせた少女だった。アップにした髪と白いうなじ。何より若々しい張りのある大きな胸。

白谷菜子という、細身巨乳の美少女だ。

物腰が穏やかで、礼儀正しく、良い子。

最初はそう思っていた。

なのに……俺に向かつてワキガとか言いやがった。許さない。

拓郎は身勝手な悪意を加速させる。残忍で狡猾で、極度の被害妄想を覚える。

あの落差は激しかった。優しい子だと安心させてからの暴言は、最初から生意気なのより何倍も罪は重い。

拓郎は血走った眼を、ぐったり脱力した菜子に向ける。

少女は頬をほんのり染めて、完全に眠っていた。

拓郎の身体を支えにかるうじて立っている状態だ。

拓郎は浴衣姿の少女の匂いを嗅ぎつつ、ほくそ笑んだ。

いそいそと管理人室のドアを開けて、菜子を連れ込む。

「部屋に戻りたくないんですか？ 困りましたねえ」

管理人室に仕掛けられたカメラですべてを撮る。それをネタに追い込む。

拓郎は遊び心たっぷりの演技をするのだった。

「う、ん……」

拓郎に支えられながら、少女はまだまだ朦朧もうろうとしている。誰に何をされているかわかっているように。

薄暗い管理人室の中、拓郎はまず、菜子を部屋のトイレに連れ込んだ。

「飲みすぎですか？ 吐きますか？」

狭いトイレに菜子を軽くうつむかせる。

「大丈夫ですか？」

にやにや笑いつつ、拓郎は菜子の背後から覆いかぶさる。

介抱をするふりをして、少女のほっそりした背中と尻にのしかかり、全身をこすり

つけてやる。

柔らかい。甘く濃厚な少女の匂いがして興奮する。

拓郎は心臓をバクバクさせながら少女の浴衣に手を入れ、腹をさすった。

「大丈夫ですかあ〜？ 吐いてもいいですよ」

半笑いで滑らかな肌を堪能する。

浴衣越しの柔らかい尻へ、盛り上がったジャージの股間をこすりつける。

「ん、う……」

抵抗はない。

どこを触られてるかわかってないようなので、浴衣の尻をまくってショーツをあらわにした。そのまま股間をこすりつけてやる。

「や、ん……」

股間を摩擦されたせい、菜子が身じろぎした。

少女のショーツに押し付けた股間がじれったく擦れて、拓郎はさらに鼻息を荒くする。

両手をブラの下に潜り込ませ、でかい乳をむんずと掴んだ。

菜子の首すじの匂いを嗅ぎながら、ナマ乳をもみ、局部に股間を押し付け、

「大丈夫ですか、ハアハア、大丈夫ですかあ〜」

介抱という茶番をしつつ、もはや獣の交尾のような態勢になった。

甘い体臭のする浴衣姿の少女に、拓郎は夢中になって全身をこすりつけているので

ある。

「あ、あ……」

か細い喘ぎ^{あえ}。鼻腔いっぱい少女の匂い。服越しに柔らかく性器が刺激されている。極上の美少女が相手という事実にもはや射精しそうな拓郎だったが……。

宿泊予約の名前と年齢を見て『遊び』ができるかもしれないと、この日のために精液を一週間貯めてきたのだ。ここで無駄にするわけにはいかない。

拓郎は菜子をまっすぐ立たせた。

正面から抱きつき、そのまま引きずるようにトイレを出る。

暗いままの管理人室の中央まで連れていき、

「お、お客さん、だめですよ〜〜」

白々しく声を上げて倒れる。まるで酔った女子に押し倒されるように。後々の証拠動画で使うために。

仰向けに倒れた拓郎の胸の上で、菜子の大きな乳が潰れていた。

間近にあるのは清楚な、トップクラス美少女の顔。

拓郎は思わず菜子の顔面を掴み、唇を押し付け、

「ん、む……」

唇に舌を挿入する。

にゆるにゆる粘膜をこすりつける。お互いの唾液を混ぜ込むように、念入りに舌と舌を絡める。

「んう……あむ……んん」

少女のくぐもった呻き声と、下品な水音が静かな部屋に響いた。

こんな美少女と、ここまで深く粘膜接触できる男なんて普通はいない。

拓郎は菜子の前髪が吹きあがるくらい鼻息で、口の粘膜をむさぼっていた。

「あの翔くんとはしていないんだろ？ 先に奪ってすまん」

拓郎はにやにや笑いつつ、また唇に舌を挿入し、これでもかと蹂躪する。

と、何度目かの息継ぎの時だった。

「しよう、くん……？」

暗い部屋の中、ぼんやり眼で菜子がつぶやいた。

拓郎は、ぴんときて「そうだよ」と答えつつ、もう一度キスをする。

すると、菜子がさつきより積極的に舌を絡めてきた。

「ん、んぷ……ん、しょうくん、すき……」

唾液を絡めながら、あのイケメン野郎の名をこぼす。

やはり勘違いしているようだ。

視界はぼんやり、部屋が暗く拓郎の顔が見えづらいせいもあるのだろう。

拓郎は思った。

どうするか。動画の素材はそろったことだし、もう本番に入ることしよう。

拓郎は菜子の身体を転がし、布団に仰向けに寝かせた。

すでに浴衣ははだけきつている。

ほどけた帯、ずれたブラと巨乳の谷間、ショーツはもはや全開になっている。目はうつろで、気を抜けばすぐにまた昏睡しそうな状態のままだ。

拓郎は鼻息荒く服を脱ぎ、全裸になった。

「……俺だよ、翔だよ」

拓郎は、菜子に正常位の体勢で覆いかぶさると、そう耳元でつぶやき、

「ん……すき……あ、ん……ちゅ……」

また深々と舌入れキスをする。ブラはずらし巨乳を露出させた。

下着以外は隔てるものがない、ほとんど全裸の正常位体勢だ。

拓郎は美少女にしがみつき、股間と全身を情熱的にこすりつけ合った。

拓郎の全身が若く甘い体臭にまみれる。

代わりに菜子の身体は拓郎の汚い皮脂を擦りつけられている。

「ん……あ……」

拓郎は身体を起こし、仰向けでもツンと立つ若々しい巨乳を、思い切り揉んだ。

最高のトロフィーを手に入れた勝利の感覚があった。

乳首をペロペロ舐めると喘ぎ声が出た。この最高の美少女を自由気ままにコントロールしている気にもなる。

揉んで、乳首を舐め、気が付いたら舌を深く絡ませるキスの正常位体勢で股間をこすりつける。

ふと気が付くと、菜子のショーツがべちゃべちゃに湿っていた。おそらくこの少女の体液と、ペニスの先端からこぼれる大量の先走り汁のせいだろう。

「やっべ。お前、すげー濡れてる」

半笑いでショーツをずらして膣に軽く指を入れると、もうぐちよぐちよだった。

「これからナマの交尾するから」

菜子の耳元でつぶやくと「……？」と胡乱な反応が返ってきた。

「俺だよ、翔だよ。好きだよ」

やはり最初は夢の中にいてもらおうと、ふざけてつぶやく。

すると菜子の身体からふっと力が抜けたので――、

拓郎は思い切り生の肉棒を挿入した。

「――っ！」

汁まみれの肉棒が、にゅるる、と狭い肉壁を滑っていく。

途中何かに引つ掛かった気がしたが、一気に奥まで入った。

「し、しよう、く、ん……っ！」

菜子の身体が硬直した。

拓郎は陰部から背骨まで響く快樂刺激を味わっていた。一瞬で射精しそうになったが、何とかこらえる。

「やっべ……」

にゆるにゆると菜子の粘膜が肉棒を締め付けてくる。

肉棒を膣の奥へ奥へと誘うように、粘膜が絞り上げるような動きをしてくる。

まるでチンポを喜ばせるために生まれた膣だ。

「あー、お前ゼってー俺のオモチャにするわ」

最高の名器を持つ最高の美少女に拓郎の征服欲が盛り上がった。

しばらく動かずに耐えていたら射精の波が収まったので再び腰を振る。

巨乳を両手でわしづかみにしながら、にちっにちっとな肉棒でほじくるように、ナマ膣の感触をヒダ一枚まで丁寧に味わう。

ふと気づくと、薄明かりの中、ペニスに絡む粘液が赤みがかっていた。

……処女だったのだろうか？

挿入した時、何かを破る抵抗感があったので、もしかしてと思ったが……。

自覚した瞬間、かつと全身の血が逆流するような感覚がした。

「はあ、はあ……っ！ お前の処女、俺がもらったぞ……！」

処女を奪った。処女膜を生チンポで破った。もう処女膜は再生しない。中年のチンポが、この美少女に一生消えない痕跡を残した。

心臓がバクバクする。最高の美少女の聖域を初めて征服したのは拓郎なのだ。

「やっべ、腰止まらね」

拓郎の征服欲が刺激され、腰の動きが加速する。

菜子の膣粘膜も、肉棒をちゅうちゅう抱きしめてくる。

拓郎はペニスを膣奥まで挿入し、唇には舌を入れ、美少女の粘膜をたっぷり味わいながら、激しく腰を振る。

「あ、んむ、ん、あ♡ あっ♡ んっ♡」

上の口では唾液をかき混ぜる。下の口では愛液と先走り汁をかき混ぜる。

キスの息継ぎの間、菜子の口から本格的なメスの喘ぎ声が出てきた。

喘ぎ声に興奮して、腰の動きがさらに早まる。

膣の奥にこつんと当たる感触がした。子宮口が降りてきたようだ。

出したい。思い切り種付けしたい。

だがそれだけでは面白くない。

拓郎をイケメンと勘違いしたこの女にとって、幸せな種付けになるからだ。
快樂のチキンレース。

拓郎は耐えに耐え、膣がぎゅう——つ、と締まったところで動きを止め、理性で耐える。

「~~~~~♡」

理性のブレーキがない菜子は、四肢をぴんと張って、絶頂していた。

この少女がもし処女であるなら、普通は初めての性交でイケるはずもないのだが、おそらく想い人のイケメンと性交する興奮が、すべてに勝つたのだ。

最後までイケメンチンポと間違えてイッた馬鹿マ○コに、ついつい拓郎は笑ってしまふ。

菜子の荒い息が収まった。

さて、ここからが『遊び』の始まりだ。

拓郎は近くのリモコンに手を伸ばし、ぱっと部屋の電気をつけた。

明るさMAX。菜子の真っ白な肢体と、ペニスでつながった拓郎の茶色い身体がコントラストを作っている。

「……? だれ……?」

おそらくまだ視界は朦朧としているのだ。

だが、これだけ明るければ嫌でも気づくだろう。

深くつながっている相手が、想い人のイケメンでなく、最悪に醜い生物であることくらいは。

「え？ どうしたの？ 菜子ちゃん、何かあった？」

拓郎は白々しく聞きつつ、肉棒をひと突きする。

少女は「あ♡」と一瞬間えると、すぐに恐怖の表情になり、

「だれ……わたし、しょうくと……」

「知ってるよ。翔くん好きなんだもんね。でも、寂しくて一晩だけ浮気したい、つて言ったの、菜子ちゃんだよ」

混乱した頭に、嘘八百を流し込んでいく。

「うそ……うそ……あ、だめ」

ぼんやりと、しかし確実に愕然^{がくぜん}としている表情の菜子に、本格的に腰を振っていく。

「浮気セックス気持ちいい？」

「いや、違……あ、あ♡ あ♡ あっ♡」

甘い発情臭を放つ少女の耳元でささやき、下半身はナマの肉棒で突きまわす。理性と本能は違うようで、拓郎のペニスの動きに、菜子の膺はしっかり応えてくれた。

「だめ……だめ……あっ♡ はな、してっ」



力なく暴れるが膺の反射は強い。言葉とは裏腹に肉棒を締め付けて離さない。

少女の子宮口も早く精液をよこせと亀頭に吸い付いてくる。鈴口から漏れる大量の先走り汁をちゅうちゅう飲み込んでいる。

拓郎は射精感をこらえつつ上体を起こし、美少女の顔を見つめた。

「え、浮気じゃん、ばらしていいの？ 彼氏にばらすよ」

「うわき、じゃない。だめ……おねがい」

「なんだよお前がセックスしたいって言ったんだからな！ じゃあ彼氏にばらすわ！ このままあのイケメン野郎呼ぶわ！」

拓郎が乱暴に叫ぶと、菜子はびくりと身体を震わせ、

「だめ……おねがい」

「っ！か証拠に写真撮るからな！」

拓郎は傍らにあったスマホを取った。

正常位でつながったまま、バシヤバシヤバシヤバシヤと連続で、激しいフラッシュを少女に浴びせていく。

「あ、あ、だめ……」

顔は隠して巨乳は丸出しな少女の間抜け姿に、拓郎はほくそ笑む。

またバシヤバシヤと連写してやるが、実際はスマホどころかこの部屋には三つのカ

メラがある。

後でつなぎ合わせて作る面白動画はスマホのエロ写真など比較にならないくらい悪質なものになる予定なのに、スマホ相手に必死になる菜子が滑稽だった。

「ごめんなさい……なんでも、しますから。しょうくんには、ばらさないで」
嘘と勢いで勝った。

少女の懇願に、拓郎は下卑た笑みを浮かべて勝利を確信する。

「じゃあさ、三〇分でもいいからさ、俺の彼女になってよ」

「……………」

「三〇分でもいいから。そうしたら写真も消すから」

あくまで優しく、条件付きの交渉。

「……………わ、わかりました。かのじよに、なります」

これで言質が取れた。恋人プレイをする口実もできた。

「よし、それじゃあ今から俺の彼女だからな？」

拓郎はまず恐怖で少しだけ固くなった膺をほぐそうと、ゆっくり腰を動かすことにした。

「あー彼女マ○コすげえ気持ちいいわ。お前のマ○コ、にゆるにゆるしてすげえスケベだよな」

「いやあ……」

「こんな濡らしてドスケベすぎんだろ。俺のカノジョ、淫乱マ○コすぎて笑えるわ」
彼女扱いどころか、心無いセクハラ発言を浴びせつつ、ナマの肉棒をゆっくり動かして少女の膣を味わう。

膣奥をゴリゴリほじると、少女の身体がびくりと跳ねた。

「へえ、菜子ちゃん、奥が感じるんだ。子作り交尾にすげえ向いてるんだね」

「……だめ……やめて」

腰を振ると、ナマの接合部からじゅぷ、じゅぷ、と水音がしてくる。

先ほどのイケメン勘違いセックスも終わっている。なのにこれほど濡れて締まるならば、この少女にはやはり淫乱の素質があるのかもしれない。

興奮した拓郎は、さらに激しく腰を振った。

少女はされるがままに無防備なナマ膣を犯されている。

だんだん膣が温まってきた。

また亀頭を捕食するような、膣粘膜と子宮口の動きが始まる。

「つか彼氏彼女なんだから俺にキスしろよ」

「キスは……いや……」

「え？　じゃあ彼氏にばらす？　おい、ばらすぞ」

「いやあ……」

少女が涙目になった。だが拓郎は少女の泣き顔に興奮する性質なのだ。

「舌べろべろ舐めながら『好き』って三〇回言え。じゃないとばらすわ、翔くん呼ぶぞ！」

「あ、や……ごめ、ん、なさい……っ！」

「じゃあ、やれ。本気ペロチューのセックスじゃないと認めないからな！」

菜子がゆっくりと口を開けた。

「どうやらこちらまで舌を伸ばす気はないらしいが、そのくらいはサービスしてやる。舌を絡める。口に含んだ大量の唾液とともに、ねっとりとしすりつけ合う。」

「んく、ん……」

拓郎の口から流し込まれる唾液を飲み込みながら、少女が必死の正常位ペロチューをしている。

「おら、『好き』は？ 三〇回な」

「……す、すき、です」

「ねちよねちよ舌を巻き付けるようにしつつ、菜子が『好き』を言い始めた。」

同時に、拓郎が激しく腰を振り始めると、

「あ、好き……んぶ、すき、です、あ、すき♡ あむ、ん、好き、です♡ あっあっ

♡ 好き、好きです！ ちゅむ……すきっ」

ナマの生殖器と、舌の粘膜をこすりつけながら、ヒートアップしていく。まだ朦朧としている理性。本能のままの子宮。

とどめは口にした言葉で、現実とプレイの境目が曖昧になっているのだろう。

時折本気の恋人セックスのような『好き』と舌の絡みを感じた。

拓郎は菜子の上体を起こし、対面座位で唇をむさぼりながら腰を振る。

「すき……すき、です、ん♡ ちゅむ……すき、すきっ……♡」

どう見ても恋人セックスだった。

完璧だ。後の映像を編集するのが楽しみになってきた。

拓郎はにやにや笑いつつ、そろそろ限界が近いのを認識していた。

「そろそろ出すわ。菜子のマ○コにナマ射精するから」

「へ……？」

唾液でべとべとになった口元を離すと、菜子が呆けたような返事をした。

拓郎は構わず、菜子を対面座位から正常位へと押し倒す。

「最初から避妊してない生チンポで生のセックスしてんだよ。あーもう中に出すわ。俺の精子で菜子のこと妊娠させるからな」

妊娠の言葉で状況に気づいたのか、少女が今日一番の抵抗を見せる。

「いや……にんしん、だめ……抜いて……！」

だが正常位でしっかり抑え込みが入っている。

拓郎は吸い付く腔に、獣のように肉棒を押し付けていく。

子宮口に鈴口から大量の先走り汁を塗り付けて、パンパンの睾丸からは、大量の精液が出口を求めペニスの根元まで迫ってきていた。

「だめ……ほんとに……」

「じゃあ『私の奥に、たくさん中出ししてください、私の卵子を受精させてください』って言ったらしいぞ」

拓郎は、最後の最後まで鬼畜な要求をする。

「そんなの……いや」

「言えたら我慢してチンポ抜いてやるんだけどなー。じゃあこのまま出すから。あー出る出る。すげえ精液出る。ああ妊娠しろっ！」

「あ、まって……まって」

懇願する少女の子宮口をゴンゴン突きながら、拓郎は下卑た笑みを浮かべる。

「あ、わたしの、たくさん、なか……わたしの……」

「きちんと言え。あーもう出るぞ！」

「いやあ……ん、わたしの、おくに、たくさん……なかだし、してください……」

「声小せえ。あと俺の目みて言え」

「いやあ……わたしのおくに、たくさん、なかだし……してください」

見つめ合って、まるで本気で中出し懇願するような顔に、拓郎の射精感が最高潮まで盛り上がった。

「最後は『私の卵子を受精させてください』だろ？」

「ひう、あつ♡ わ、わたしのらん、しを、じゅせいさせて……ください……っ！」

完全征服。拓郎は射精動作に入る。

「おら最後は舌出せ！」

命令の勢いに菜子が口を開けたので、拓郎は太い舌を挿入してぐちよぐちよと絡ませた。

菜子の汗ばんだ白肌と巨乳に全力で密着する。抱きしめたまま肉棒をドンドンと深く細かく出し入れさせて、生殖器を深く結合させる。

子宮口と亀頭の鈴口がディープキスをして、膣の粘膜が一段強くひと絞りされた瞬間。

「ん——っ！」

拓郎の亀頭が、菜子の最奥で弾けた。

びゅぶっ！ びゅぶぶっ！ と射精の汚い拍動音が拓郎の耳の奥まで響く。一週間

溜めた黄ばんだ精液が、菜子の膣奥を濡れさせているのだ。

子宮口も反射で精液を吸おうと蠢うごめいている。拓郎の腰を強烈きょうれつな快楽刺激が突き抜け、下半身が自分の身体でなくなるような感覚に襲われた。

びゅぶ！ びゅぶ！ と射精の強い拍動がまだ続いている。

視界は真っ白だ。口にはさらさらの唾液が湧いて出て、唇を密着させた菜子の口内に流れ込んでいく。

数秒間の気絶したような感覚。やっと我に返った拓郎は、極上の美少女に種付けできたことを理性でも喜び始め、

「ああ！ オラ！ 孕め！ 孕め孕めっ！ 受精しろっ！」

一〇代の美少女に、無責任中出し。菜子の耳元で征服の勝鬨をあげるように叫んだ拓郎は、また龟头を子宮口にこすりつけた。

まだ射精が終わらないのは、美少女の膣が精液を搾るような動きをするせいだった。やっと射精が止まったかと思っても、貪欲な膣が断続的に締め上げてくるのだ。

拓郎はその都度、身体を震えさせながら、ばびゅっつとひと噴射ずつ射精した。

「はあはあ……あ……最っ高」

汗だくの拓郎の身体の下、菜子は息をつきながらやはり朦朧もうろうとしている。

おそらくおねだりの代わりに中出しをやめる約束をしたことも覚えていないのだ。

「そろそろ、か」

一〇時になると、時間ぴったりにイケメン野郎の翔が来た。

菜子がひどく嬉しそうな顔になる。さらにテンション高いふりして、普通にイケメン野郎の手を握りだしてもいる。

この少女にしては大胆な行為だが、先週の体育倉庫、友人との会話で、翔が一定の好意を菜子と莉奈に持つことがわかつている。

あのイケメン野郎は鈍いふりしたスカシ顔で、菜子と莉奈にいつもドキドキしているらしいのだ。

ある程度好意があるという確信のおかげで、憧れの彼へボディタッチができたということなのだろうが……。

よかつたな、俺と体育倉庫でナマ交尾してて。情報を制す者は戦いを制す。莉奈との戦いもこれで一歩リードだ。

拓郎はくっくと笑いつつ、作戦に移ることにした。

スマホを耳に当て、イチャイチャする二人の下へ。

「はい、はい、ええ、先方の珍宝ちんぼう様も暴れん坊で困っております……」

誰かとビジネスの電話をしているふりをして、あと数歩の至近距離まで近づくと、菜子の顔がさあつと青ざめた。

一方の翔は、一カ月前に一度会っただけの拓郎のことなど忘れていたようで、スマホをいじって何かの予定でも見ているようだった。

「私も困ってるんです。お客様、電話の電源切っちゃって。申し訳ありません。お連れ様のSNSに動画を貼るなどして連絡したいと思っただけなんです。」

菜子へと、ニチャア、とねばついた笑みを向ける。

そしてその場を去る。

携帯へワンコール。菜子のスマホの電源が入ったようだ。

また遠くから覗く。さつきまでルンルンだった菜子が周囲を見回している。顔色に明らかな緊張の色が見えていて、爆笑しそうになった。

拓郎はメッセを送った。

拓郎『たまたまだ。邪魔する気はないぞ』

菜子『✓既読』

まあ嘘なんだけどな、と拓郎は二人の後をつけていった。

美少女とイケメンは、カフェで二人、お茶を飲む。デパートの服売り場や雑貨コーナーを回る。

憧れのイケメンとのデートをしばらく楽しんで菜子が、どうやら本当に邪魔してこないようだ。と次第に表情を緩ませ、周囲を警戒しなくなった頃――。

拓郎はメッセを打った。

拓郎『菜子ちゃん。そろそろトイレ行ったら？ 俺も行きたい。連れションしようぜ。同じ階の身障者用トイレで待ってるよ♡』
菜子『✓既読』

広い個室トイレで待っていると、ノックの音が聞こえた。

ドアを開けると、白ワンプの清楚な細身巨乳ちゃん。

「じ、じゃましないって……ぐすん……言った、のに……っ！」

涙目が最高に興奮したので、腕を掴んで乱暴に抱きしめる。

やはり柔らかくていやらしい身体だ。

それにイケメンと一緒にいて興奮していたせいか、少女の甘い匂い、つまり発情臭がいつもより濃い。たまらない。

「お、おねがいます……は、はやく戻らないと。翔くんが待ってるからあつ」

「あゝあ、ここで二時間かけて濃厚セックスしたくなかったな」

「いやぁ……っ！」

「言うこと聞くなら五分で済ませてやるぞ。もちろんセックスもしない」

「……………ほんとう、ですか？」

「ああ、本当だ。俺は契約については嘘つかないだろ？」

「……………」

「じゃあ、濃厚キス五分間な。嫌なら個室トイレセックス二時間だ」

菜子の顔にじんわり涙が浮かぶが、時間がないとわかっているせいか、拓郎が舌を入れても抵抗せずにキスを受け入れた。

「ん……………んむ……………ちゅ……………んむ……………ちゅむ……………」

菜子を抱きしめながら、舌をペロペロ絡める。

イケメン野郎のために完璧におしゃれしてきた身体を抱きしめて、拓郎の体臭をなじませていく。

甘い匂いの柔らかい身体に金玉をびくびくさせつつ、好きな男とのロマンチックなキスを期待した唇を汚していく。唾液をたっぷり交換してやる。

さらにトイレに座って対面座位になる。勃起したズボンを美少女のショーツにこすりつけながら、少女の口に唾液を送り込んでぐちゃぐちゃにかき混ぜていく。

「ご、ふん……………おわかりました」

「そうか、じゃあ頑張つてこい」

拓郎は素直に菜子を解放し、イケメン野郎の下へ向かわせる。

だが——ここからが始まりだった。

一時間後。

ここは、駅地下街の個室トイレ。

「なんで……また呼び出したんですか」

「五分钟な。今度はフェラだ」

「……………っ」

「時間もないし挨拶抜きでしゃぶれ。手え抜いたらそのままセックスするから」

拓郎がぼろんと勃起ペニスを出すと、時間制限のせいか菜子もやけくそになって舐めだした。

にゅちっ、にゅちっ、と少女の赤い舌が、どす黒いチンポをしゃぶる。

イケメン野郎のために丁寧メイクした顔をひよつとこにしてペニスを吸い上げる。

「ご、ふん……」

「よし、行け。頑張れよ」

さらに一時間後。

ここは映画館の個室トイレ。いま翔くんは映画に夢中だ。

「もう……やめて」

「五分間な。今度はいつもの前戯交尾だ」

ワンピースのスカートをまくり、露出したペニスを生温かいショーツにこすりつける。

まくった衣服に手を入れナマ乳をしっかりと揉みしだく。うなじの甘い匂いを嗅ぎながら、布越しの秘部にペニスをこすりつけ交尾プレイをする。

「ご、ふん……」

「よし行くか。この映画面白いな」

一時間ごとに、これの繰り返しだった。

呼び出して、濃厚キス。フェラ。衣服越しの性器こすりつけ。それを繰り返し返す。

性的刺激を断続的に与え続けたせいかわ、菜子の頬は常に赤く染まっただけで、エロい匂いをぶんぶんさせていた。

あのイケメン野郎もそんな菜子を見て顔を赤らめていたような気もする。

よかつたな、天然の香水だぞ。イケメンもドキドキだわ。まあ濃厚キスしながら一番近くで匂いを嗅いだのは俺なんだけだ。

拓郎はほくそ笑みながら、駅の改札で別れる二人を見つめつつ、さらに次の行動に出たのだった。

デート終了後の夕方。

薄暗い街の一角の、とあるラブホの一室。

「あつあ——っ！ あつあつ♡ やっ！ だめっ♡ あつあつあつあつ♡」

拓郎と菜子は、普通にセックスをしていた。

お互いに一糸まとわぬ姿で、ふかふかのベッドの上で、正常位で、ナマの性器をぶつけ合っているのだ。

拓郎は美少女の汗ばんだ身体を抱きしめ、何度も肉棒を膣奥に押し付ける。

「あゝあ、翔くん、デートは夕方で終わりとかお子様かよ。っーかお子様か」

まだまだ菜子と翔の二人は学生で、友人の距離感だ。

夕飯は各自の家で食べることにしたらしく、あつさり解散したのだった。

「普通は夕食までデートして、その後はセックスするのが大人の恋人なんだぞ」

デート解散後に菜子に近づくと、菜子は日中の卑猥な妨害への文句を涙目で訴え始めた。そんな菜子の手を引き、最寄りのラブホに連れ込んだのだ。

「菜子ちゃんの大人マ○コもセックスしたがってたのに、薄情なカレだよな」

連れ込みに抵抗していた菜子だったが、ラブホのエレベーターでショーツに手を突っ込んでみると、驚くほどぐちよぐちよに濡れていたのだ。

「あな、たがっ、一日じゅう、へんなこと♡ する、からっ！ あっだめだめ、あっあっあっ♡」

なので部屋に入っすぐ押し倒した。

もどかしく服を脱がし、ナマの肉棒をびしょ濡れマ○コに即ぶち込んだ後、正常位で腰を振りまくって菜子を何度も絶頂させ、今に至る。

「それ、に、ごむ……は……っ!!」

「今日持つてねえわ。あと生理後で安全日だろ。別にいいよ、今日はプレイとかなしで普通に中出しセックスしようぜ」

「だめっ。なかは、だ、め、あっあ——っ♡」

「そうだなあ、あと五分いくのガマンできたら外に出すわ」

「またっ、ん♡ ご、ふんっ!!」

「五分でイっちゃったらあきらめろよ。お前のマ○コが普通にセックス楽しんでる証拠なんだし」

「い♡ やっ!」

「俺とのセックスが無理やりだっと思うならイくはずないよな？」

「ん………わかつ♡ たあつ」

契約成立。

五分間の真剣勝負だ。

拓郎はまずペニスを亀頭のあたりまで膣から抜く。

そして、どすんと一気に、挨拶代わりの大きなひと突きをした。

「~~~~~♡」

菜子の脚がぴーんと伸びる。

膣は強く締めまり、唇を半開きにしてぶるぶる震えている。

ええと、待って待って、これは。

「は!! お前五分どころか、ひと突きでイってんじゃねえか!」

さすがの拓郎も驚きだった。

「はあーっ♡ はあっ♡ イって、ないいっ♡」

「どう見てもイってんだろ! ああ中出しするからな!」

「だめ……だ、あっあっあ——っ♡ あっあっあっあっあっあっあっあっあっ♡」

菜子の身体が面白いほどに跳ねる。膣の粘膜も異常な動きをしてペニスを締め上げる。子宮口が亀頭に吸い付いて、中出し精液を必死に要求している。

デート後。

は当然のように行っているのだ。

「おらっ！ 子宮口を開けっ！ 受精しろっ！ 返事！」

「あ、あ♡ あっ♡ は、はひい……！」

「ああっ！ お前もう俺の精子で妊娠したからなっ！」

安全日ゆえの妊娠同意プレイも欠かさない。

美少女に、拓郎の精子で妊娠して人生を捧げる宣言をさせるのだ。

「は……あっ♡ あ、あ……っ」

菜子は絶頂しすぎて、痙攣しながら意識を飛ばしかけていた。

拓郎もペニスから精液を断続的に垂れ流しつつ、美少女の肢体にぐったりともたれかかって幸福の余韻に浸っていた。

俺がこの女の恋人だ。

拓郎の妄想が、自然と加速する。

俺が恋人だ。だって中出しセックスした。菜子も気持ちよさそうだった。俺の精子で妊娠すると言った。

妄想。没入。

自分が正式彼氏と思えば、イケメン野郎にデレデレしていた「恋人」に嫉妬と怒りが湧いてくる。

このカノジョ、ちよつとしつけてやろうかな。

拓郎は菜子からペニスを抜き、ベッド下のカバンからあるものを取り出した。

「それ」は、リング部がふかふかのファーで包まれて優しいフォルムをしている——手錠だった。

まずは絶頂後、巨乳をツンと上に向け息を荒くさせている菜子を、うつぶせにする。後ろ手にして、両手に手錠をはめ、

「な、なに？」

さすがの菜子も意識を取り戻したようだ。

「俺のカノジョ、スケベな気持ちが見え顔に出るから矯正してやろうと思ってる」
手錠を外そうと抵抗しながら、菜子が困惑の表情を浮かべている。

拓郎は床に落ちた菜子のポーチを拾うと、中からスマホを取り出して、
「それ、わたしの」

一カ月前の宿泊時に、一度いじったことがある。指紋でロックが外れるのだ。
「ん、やめっ！」

拓郎はうつぶせになった菜子にのしかかり、手錠で拘束された指を使ってスマホのロックを外す。すぐに設定を変えて放置してもロックされないようにする。

あとは何もせず、スマホをベッドボードに投げて放置する。

「へ？ なにを？」

拓郎の奇妙な行動に、菜子は首を傾げていたが、

「あつ！ だめだめっ、あ——っ♡！」

拓郎は菜子を後背位の体勢で引き寄せ、精液を垂らす肉唇にもう一度ペニスを挿入したのだった。

「やつ！ んっ♡ だめっ！ あっあっ♡ おく、だめっ♡」

最初は普通に交尾する。

本能のままにナマの性器を動物のようにこすり合わせる。

菜子の膣が締まって子宮口がペニスに吸い付いてきた。

二回目なのでもう温まっている、そろそろ本番か。

拓郎は菜子にバックで挿入したまま、ベッドボードのスマホに手をかけた。

後ろ手に拘束された少女の目の前で、スマホをいじる。

電話。

履歴。

桃田翔。

スピーカー。

「あ——っ！ だめっ！ だ、め！ いやっ♡ おね、が、いつ！」

生ペニスをきゆうと睦で締めながら菜子が叫ぶが、遅い。

『——はいもしもし翔です。菜子、どした？』

すぐにイケメン野郎が出た。

「~~~~っ♡ ~~~~~っ♡」

菜子が声をこらえる。脂汗をかいてガマンして可愛いと思っちゃった。

『もしもーし』

「う、うん、ごめん、ね、突然、でんわ、して」

『いやぜんぜん』

「あのね……♡ あのっ♡ あ、ごめん、ようけん、わすれちゃった……♡」

『はは、菜子はばかだなあ』

「いやあ……♡ そんな、こと、んんっ！ ないっ♡」

イケメンの言う通り巨乳のバカやんけ、とチンポで文字通りツツコミを入れると、菜子が一瞬だけ嬌声きょうせいを上げた。やばい。面白すぎるオモチャだ。

『でも、俺ももうちょつと話したいと思っちゃったからさ。夕飯も一緒に食べばよかったなーって』

「そ、そうなん、だ♡」

馬鹿イケメン、ナイスプレーだ。会話を引き延ばしにかかりやがった。

拓郎は腰を止めたまま、たまに肉棒をびくつかせて菜子の反応を楽しむことにした。『菜子と話しているとすげー楽しいし、なんつーか落ち着くんだよな。もつと一緒になりたいって思う。お前に友達多い理由わかるよ』

菜子の膺が勝手にきゅーんとなった。「一緒にいたい」で反応したようだ。

「ほん、と？　っ♡　っ♡　ありが、とお♡」

俺という正式彼氏がありながら、またイケメンに媚を売りやがって。

腹が立ったので拓郎は交尾を再開する。腰をゆっくり動かしていく。

「っ♡　ゝゝっ♡　っ♡　っ♡　っ♡」

菜子は下腹をひくひく悶えさせてガマンしていた。

「それと夕飯で思い出したけど、菜子の手料理も久しぶりに食べたいな。親がいると恥ずかしいからって、親がいない時しか家に誘ってくれないしさあ」

菜子の膺がまたきゅーんと締まった。

ああ……畜生。親のいない家で、二人きりで、菜子の手料理を食ってた、だと。

てめえ、どんだけ彼氏ヅラしてんだコラ。

拓郎の筋違いな被害妄想にどんどんスピードがついていく。

「菜子の手料理ってめちゃくちゃ美味くてさ、菜子って絶対良いお嫁さんになるよなーとか、この料理毎日食いたいなーとか、毎回……うわやべっ！　口説いてるみたい

じゃん！ セクハラごめん！」

「ん♡ ぜん、ぜんっ♡ あ、あっ♡ ありがとっ♡」

ラブラブ夫婦生活を示唆するような発言に、菜子が嬉しそうにしていた。なのに汗ダラダラの姿で耐えているのが、拓郎の嗜虐心をそそる。

ああいいぞ。ラブラブ夫婦生活したいならさせてやるよ。

拓郎は、本気で腰を振り始めた。

夫婦といえば子作りだ。俺が中出し交尾で妊娠させてやる。

拓郎の生ペニスが敏感な膣奥を無遠慮にほじる。ふるふると快感に耐える少女の粘膜に、ずぶり！ ずぶり！ と激しく亀頭が突き刺さる。

「——っ！——っ！」

菜子が身体をねじって、のたうち回るように悶えていた。

「っーか、菜子、体調悪いのか？ さっきから声が変わだぞ？」

「うん……っ♡ かえ♡ ったら、ねつが、三八℃、あつてえ♡」

「大変だな。そりゃ用件も忘れるわ。じゃ今日は寝ろよ。おやすみ」

「う、ん……は♡ あっ♡ おやす、みつ♡ あ」

まだまだ膣奥をドツキ回していじめてやる。

電話が、ぷ、と切れたその瞬間。



受け入れている。

「孕めっ！ 孕め孕めっ！ 妊娠しろっ！ 俺がお前の旦那様だ！」

「だめ、だめっ♡ あ——っ♡ ああああ——っ♡」

菜子は、拓郎が引くくらいイキっぱなしだった。喘ぎ声も出っぱなしだ。さすがに声がうるせえ。ラブホでよかった。

拓郎はそう思いつつ、美少女の膣奥に念入りに射精していくのだった。

結局あその後、ひたすら中出しセックスをしたのだった。

体位はシンプルに。

拓郎こそが恋人だと思いたい時には、舌を絡めた熱烈な正常位で。拓郎こそが子作り相手のオスだと思いたい時には、種付け交尾で。

菜子は声が嘎れるまで、嬌声を上げ続けていた。

最後の方には、菜子が三分ほど失神したままになり、さすがの拓郎も焦ったのだが。

○

翌日。

拓郎はペンションの管理入室で、またまた菜子のメッセを覗いていた。

今日の菜子のメッセ相手は、あの長い脚とスケベ尻の美少女、黒那莉奈だ。

【メッセ 菜子・莉奈】

莉奈「あなた、風邪、大丈夫？ 今日学校でも声ガラガラだったじゃない」

菜子「うん……熱は下がったし、なんとか」

莉奈「体調が悪い時にあれなんだけど、妙な噂を聞いたの」

菜子「なに？」

莉奈「翔ったら、「クリスマスを一緒に過ごす相手に告白する」とか言っていたらしいのよ」

菜子「ほんとう？」

莉奈「噂の発信源はバスケット部みたいだし、信憑性は高そう」

菜子「そっか。あと三カ月くらい？ ドキドキしてきたかも」

莉奈「私たちのデートも一週交代で定期的にするつもりみたいだし、翔ったら本当に決める気でのいるのね」

菜子「うん……」

莉奈「……………」

菜子「どっちが付き合っても、わたし達、ずっと友達だよ」

莉奈「わかってる。だって私、菜子のこと好きよ」

菜子「わたしも、莉奈のこと大好きだから」

拓郎「これ、今日のチンポ。(拓郎のドス黒ペニス画像)」

菜子「✓既読」

場を和ませるため送った画像は、既読無視された。もちろんグループは別口で菜子にしか見えていない。

拓郎はため息をつきつつ、狡猾な思考回路を回した。

菜子との契約も、一二回のうち残り九回である。

契約が終わってからもやる方法はいくらでもあるが、気軽に好き放題できるのはこの回数なので、大事に使わないといけない。

さらにこの契約を上手く使って、菜子の親友である黒那莉奈も毒牙にかけるつもりでいた。

——俺と、俺のペンションに、ためらいなく暴言を吐いたあの生意気女。

拓郎は妄想する。

あの長い脚の黒ストッキングを、びりびりに破くことを。

あのほくろ一つないナマ脚に、自分の醜い下半身をこすりつけることを。

あの骨盤がきゅつと上がった尻に、むき出しの汚い肉棒を沈めることを。

あの完璧モデル美少女の卵子に、自分の短足肥満DNAの精子を命中させることを。

そのために拓郎は、綿密な計算を立てるのだった。

少女たちの決戦は、おそらく一二月。

拓郎が、すべきことは――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリッシュノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の
ドキドキ
キアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫